

# アウトドアスポーツの専門志向化に関する試論 —ある女性登山愛好者のライフストーリー分析から—

A Study on the recreation specialization of outdoor sports  
: From a life story analysis of a female mountaineering enthusiast

永井 将史

NAGAI Masashi

武藤 伸司

MUTO Shinji

## Abstract

The purpose of this study was to use life story analysis method to identify factors in the development of recreation specialization in the outdoor sports. Specifically, a semi-structured interview was conducted with one woman with more than 10 years of mountaineering experience to investigate factors in the development of the process of recreation specialization formation. The results of this study revealed the following. The “influence of significant others”, “environment in tools”, and “sense of purpose” were factors in motivating the early stages of the recreation specialization process. In addition, “significant activity experience”, “interaction with significant others”, “change in orientation”, and “anchoring in identity” were factors in the development of recreation specialization.

Keywords: qualitative study, motivational factors, developmental factors

キーワード：質的研究 動機づけの要因 発達の要因

## 1. はじめに

スポーツ庁が発表した「アウトドアスポーツ推進宣言」(2017)では、スポーツを楽しむ健康的なライフスタイルの定着、アウトドアスポーツに適した環境である地方部への交流人口の拡大による地域振興、日本の恵まれた自然環境を活用した国際交流の推進等の観点から、アウトドアスポーツを推進することの重要性が述べられている。この宣言にあるように、アウトドアスポーツの推進は様々な付加価値を生む可能性があり、今後のわが国において多くの人々が一過性の参加にとどまらず、生涯にわたってアウトドアスポーツに関与していくことが期待されている。したがって、この期待の実現のために、人々のアウトドアスポーツへの関与の過程と継続の要因について明らかにすることは学術的に重要な課題であると言える。

アウトドアスポーツを含む野外で行われるレクリエーションへの関与の過程を説明する概念の一つに「専門志向化」がある。専門志向化はBryan (1977)が提唱した概念で、レクリエーション活動の参加者が活動に用いられる用具や技能、活動場面の選好に関して、一般的な状態から特殊化した状態に至る行

動の連続体であると定義されている。つまり、繰り返し行われる活動の経験に伴い、時間経過における発達過程で技能や知識を習得し、その活動への関与を高め、態度や価値観が変化し専門化するというものである。したがって、アウトドアスポーツの実践者の専門志向化の過程を検証することによって、上述の課題を解明するための有用な示唆を得られる可能性がある。

これまでの専門志向化に関する研究は、野外でのレクリエーションの歴史が長い北米において1900年代後半から盛んに行われており、実践者の特性を把握することで関連領域におけるマネジメントに有益な情報を提供してきた。二宮ら(2002)は、専門志向化に関連する研究動向と方法論を詳細にレビューした論文の中で、先行研究において中心的に議論されてきた測定指標と発達過程に関する理論について、次のように述べている。

専門志向化の測定指標については、当初はBryan (1977, 1979)が、行動と認知の要因から専門志向化を判断していたが、Mcintyre and Pigram (1992)が、コミットメントや関与といった感情的愛着が含まれていないことを指摘したことによって、現在では行動局面と認知局面に感情局面が加えられ、より包括的

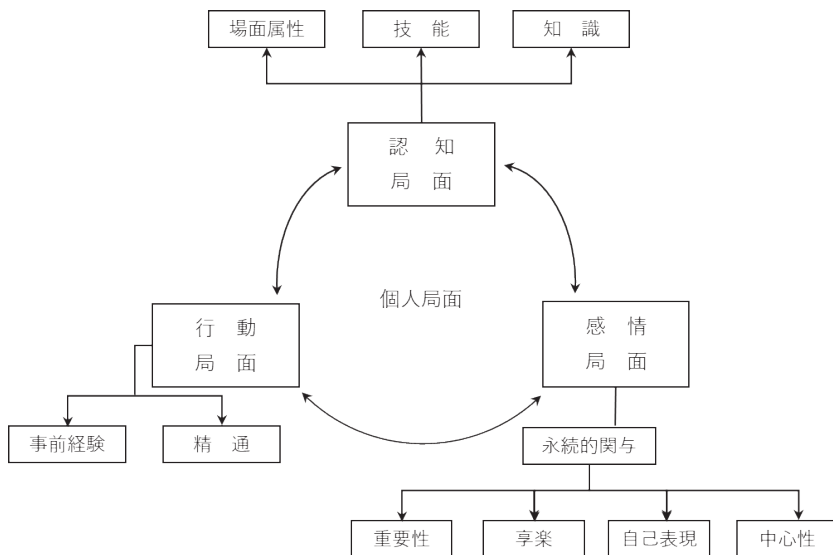


図1. 専門志向化の構成要素 (二宮ら, 2006)

で多次元の指標を用いるのが主流となっている(図1)。また、理論上の課題の一つとして、レクリエーションの参加者が必ずしも専門志向化の連続的な発達過程をたどるとは限らないことから、横断的な調査だけでなく、縦断的なパネル調査によって同一サンプルの発達過程を追跡するための時系列分析を行うことが今後の研究に望まれる。

さらに、二宮ら(2002)は、わが国におけるレジャー・レクリエーションの領域に専門志向化の概念を導入することは、日本人のレジャー行動を理解することに大いに役立つとし、フィールドワークの実施によってレジャーの社会的な観点から探求していく必要性を指摘した後、ウインドサーファーを対象とした一連の研究を行っている。

まず、ウインドサーファーの専門志向化に関する定性分析として、参与観察等のフィールドワークを行い、専門志向化過程のモデルを提示した(二宮, 2005)。その上で、続く研究ではこの専門志向化過程のモデルを応用し、コンジョイント分析によって、ウインドサーファーにおける専門志向化と選好行動の関係を明らかにしている(Ninomiya et al, 2004)。さらに、これらの研究結果から専門志向化の概念的枠組みを構築して、ウインドサーファーを類型化するための測定指標を作成した(二宮ら, 2006)。

これらの一連の研究によって、国内のウインドサーファーの専門志向化について一定程度把握されたが、今後の研究上の課題として、複雑な専門志向化過程の変遷を理解するために個人的要因、社会的要因、出来事を検討すること(二宮ら, 2005)、ウインドサーフィン以外の活動に研究範囲を広げること(2006)等が挙げられている。

これらの他に、国内における専門志向化に関する研究には、スクーバダイバーを対象としたものがある。松本ら(2015)は、日米のスクーバダイバーを対象としてオンライン調査を実施し、ダイバーにおける専門志向化と主観的幸福感の関係を検証している。また、松本ら(2018)は、続く研究において、量的調査による横断的研究では、長期にわたるレジャー関与による専門志向化の形成過程と、幸福感・レジャー満足度との因果関係を明らかにすることが困

難であるとして、半構造化面接法を用いて、専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響について質的に検証している。

以上のように、今後の我が国における専門志向化の研究においては、より多くの活動に適応範囲を広げることや、発達過程についてより丁寧に検証することが求められていると言える。

ところで、これまで述べてきたように、専門志向化の発達過程については、その多様性の高さから縦断的な研究の必要性が指摘されており(二宮ら, 2002)、長期にわたる形成過程の把握のために質的分析が用いられている(松本ら, 2018)。このことから分かるように、人々がアウトドアスポーツへの関与を深めていく過程は、長期にわたる時間的経過を伴うものであることによって、実践者の人生全体から影響を受ける、極めて個別性が高く複雑なものであることが明白である。そのため、アウトドアスポーツの専門志向化の過程について検証するためには、実践者固有の事象に焦点を当てた質的な方法によるアプローチが有効であると考えられる。

そこで本研究では、アウトドアスポーツの実践者が個人の置かれた歴史的・社会的背景と生活の規定性の中で、自らのアウトドアスポーツの実践をどのように専門志向化していくのかについての検証を試みることにし、そのための方法として「ライフストーリー分析」を用いる。

ライフストーリー分析は、「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語である。また、個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つのことである」とされている(桜井, 2012)。つまり、専門志向化の測定における発達過程を追跡することと、具体的に複雑な個人の発達要因を特定するといった問題点について、測定にライフストーリー分析を組み合わせることで、一つの解決策を提示できる可能性があると考えられる。

こうしたライフストーリー分析は、桜井(2012)の述べる通り、主観的、個別的な経験をデータとし、それに接続されている対象領域の社会や文化の全体

構造の解釈を研究するという点がその特徴となっている。しかしながら、本研究においては、アウトドアスポーツという一般概念の社会的、文化的解釈を目的とするのではなく、すでに専門志向化が進んでいる個人のライフストーリーの中から、専門志向化の発達を促した契機を特定することを目的とする。つまり、この専門志向化に関わる契機の設定によって、人々がアウトドアスポーツへの関与を継続していくことへの条件を明らかにすることを試行するのである。

以上のことから、本研究では長期間にわたるアウトドアスポーツの専門志向化のプロセスについて、実践者のライフストーリーを分析することで、専門志向化が発達する要因を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 対象者

本研究では、研究対象とするアウトドアスポーツを登山とする。その選定理由は、国土における森林率が約70%にも及ぶ我が国において、登山は歴史、愛好者数、実施時期、活動場所や形態の多様性などから我が国を代表するアウトドアスポーツであることに拠る。

本研究の対象者は、「登山を長期間愛好し専門志向化していると考えられる経験豊富な人」として、機縁法によって1名を抽出した。

本研究の対象として抽出されたAは、20代後半の女性であり、高校生時に登山を始め、10年以上の登山経験を有する人物である。

### 2.2 調査内容

本研究では専門志向化の測定指標に沿って、対象者のライフストーリーについてインタビューを行った。定性分析を行っている先行研究(二宮ら, 2005、松本ら, 2018)を参考に、「行動」、「感情」、「認知」の3局面に関して、数個の下位次元を設定して以下の通りインタビューガイドを作成した。

- ① ライフストーリー
- ② 行動局面

- 参加次元：あなたは登山をどの程度行っていますか？それはあなたの人生の中でどのように変化してきましたか？  
(登山の経験年数、山行頻度、山行期間、山行場所等)
- ③ 認知局面
  - 用具次元：あなたは登山の用具をどの程度持っていますか？それはあなたの人生の中でどのように変化してきましたか？  
(登山に使用する用具の所有状況等)
  - 技能時限：あなたは登山の技術をどの程度有していますか？それはあなたの人生の中でどのように変化してきましたか？  
(登山形態、技能レベル、習得技術、安全への配慮等)
- ④ 感情局面
  - 中心性次元：あなたの生活の中では登山はどれくらい中心的なものですか？それはあなたの人生の中でどのように変化してきましたか？  
(活動費用、自由時間の配分、活動の目的と目標等)
  - 重要性次元：あなたの生活で登山はどのくらい重要だと感じていますか？それはあなたの人生の中でどのように変化してきましたか？

### 2.3 調査方法

インタビューガイドに従って、インターネット通話を用いて半構造化インタビューによる調査を実施した。調査に要した時間は約2時間30分であった。調査対象者には事前に調査の目的や内容、倫理的配慮等についての説明を行い、研究参加への同意を得た。インタビュー内容は対象者の同意のもとで録画を行い、約4万2千字のテキストデータが得られた。

### 2.4 分析

インタビューから得られたテキストデータを基にして、上記の質問項目に合致する内容を抽出し、結果として提示した。この結果に対して、専門志向化の変化やその要因を中心に考察を加えた。その際、対象者の回答内容を根拠資料として引用した。さら

に、回答の要約や、頻出する発言、そしてそれに類する発言のキーワード化については、インタビューの文脈を考慮しつつ、要約やキーワード化の説明を付加して提示した。これらの方法により抽出された回答とキーワードの意味内容を指標として分析を進めた。

## 2. 5 倫理審査

本研究は、東京女子体育大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(研倫審・2022-35号)。

## 3. 結果

分析方法に示した通り、専門志向化における各局面と各次元について項目を立てて結果を提示していく。

### 3. 1 ライフストーリー

Aは現在20代後半の女性で、自衛官の父と専業主婦の母の第一子として生まれた。3歳下に弟がいる。父の転勤による転居と転校を数回経験しており、小学校5年生の時の引っ越しを機会にバスケットボールを始め、バスケットボールは高校を卒業するまで継続した。また、この時の転居は比較的自然豊かな土地への転居であり、子どもたちが自由に山や海で遊ぶ様子に衝撃を受けたと回想している。後に、自身も近所の子どもたちと遊ぶ中で「自然の中で遊ぶのが好き」という思いが芽生え、このことはその後登山を始めて現在まで継続していることに大きく影響している。

高校生時にバスケットボールに熱心に取り組む傍ら、父の誘いによって登山を始めることとなった。その後、大学に進学してワンダーフォーゲル部に入部したことによって、大学生時は数多くの登山経験を積み重ねた。大学卒業後は出版社に就職し、現在まで編集者として職務を継続している。入社当初はランニング関連の雑誌の編集者であったが、現在は登山関連の雑誌の編集者である。近年では、同じく登山を趣味に持つ男性との結婚と妊娠、出産というライフイベントを経験している。

高校生時に登山を始めた後、進学、就職、結婚というライフイベントが何らかの形で登山に関連していることがAのライフストーリーの特徴と言える。

## 3. 2 行動局面

### 3. 2. 1 参加次元

Aの登山の経験年数は「12年」である。上述したように、Aが高校3年生の時に父親から登山に誘われたことを契機にして「登山人生」が始まった。この契機についてAは、「高校生の時のバスケットボール部での活動の悩みに対して父親が配慮してくれた結果だった」と語っている。人間関係が上手くいかないことや競技面での結果が伴わないこと、情熱の薄れなどがあり、その気分転換として父親に誘われて登山をしたことから大きな影響を受けた。この影響の大きさには、小学生時に自然豊かな環境での生活を体験していたことや、父親が自衛官で登山に関連する技能が高かったことも背景としてあった。したがって、この父親からの誘いが登山志向への入り口であり、逆に言えば、この契機がなければ、登山を志向することはなかった可能性もあるということになる。「登山靴を買ってあげるから定期的に山に登れ」という父親からの提案も高校生時の登山経験を増やした要因であった。

その後、登山経験を増加させた要因としては、大学生時の部活動への所属が重要であった。大学でもバスケットボール部への入部を考えていたが、登山を趣味に持つバスケットボール部の指導者に相談した際、「あなたは山に登るのがいい」と言われたことをきっかけに、ワンダーフォーゲル部に所属した。当時のワンダーフォーゲル部の指導者が熱心であり、「登山に関する様々な面で世話を焼いてもらった」ことも大きな契機であったと述べている。部員同士で登山計画を立てる際、指導者らしい専門的な指摘やフォローがあったことで、大学生時には数多くの登山を実行することができた。

さらに、山行頻度と山行期間を尋ねると、Aは前者について「週1回」、後者について「夏季をピークに5月～11月が中心である」と答えている。後者については、「冬山も登るし、冬山登山用の装備もある

が、基本的には上記の期間に集中している」。他方前者であるが、週1回の頻度となったのは、「社会人になり、山岳系雑誌の編集者として働くようになった頃から、仕事とプライベートを兼ねてその頻度となった」。それ以前の大学生時には、ワンダーフォーゲル部の活動で、「4年間で100回を超える登山」を行っている。

この山行頻度におけるインタビュー内容について、特筆すべき語りとして、Aは大学生時に、「次々に難度の高い山に挑戦したい(ステップアップ)、ありとあらゆる山に登りたい(コンプリート)という目標を持っていた」ということが挙げられる。景色を見たい、山の雰囲気を感じたいという動機よりも、「より高い山、より多くの山へ挑戦する」「自分の体力を試したい」といった、言わばアスリートの志向において登山経験を重ねてきた。その後、就職してランニング雑誌の編集者になり、取材を兼ねてトレイルランニングのレースに出場する機会が増えたことにより、次第に大学時の目標は薄れ、「レース中のエイドや観光地の情報、山の地形を見る」ようになっていった。山行場所については、大学時は北アルプスが中心であり、社会人となってからは、仕事柄全国各地の山に登るようになった。

### 3. 3 認知局面

#### 3. 3. 1 用具次元

Aは、「ザックやシューズは山に合わせて複数個、各6個ずつ。他にトレッキングポール、ピッケル、アイゼン、ハーネス、バーナー、シュラフなど、それらはそれぞれ2つか3つずつ。主だった登山用具は一通り所有している」と答えている。これらの装備は、「失敗経験を重ねるごとに充実させていった」と語っている。Aは、「登山を始めた頃は体力に自信があり、行けば何とかかなと思って臨んでいたが、結局その都度痛い目を見ていた」という。例えば、「大学生の時はワンダーフォーゲル部にあるものを借りるだけだった。特に何が必要か調べもしなかった。しかしそれだと結局、Tシャツの枚数が足りない。綿のTシャツで行って、すごく寒い思いをする。夏山だからそんなに寒くないだろうと思って、シュラフ

カバーだけ持って行って寝てみると結果寒かったとか。あとはゴアテックスじゃない安物のレインウェアで行ったら、びしょ濡れになって帰ってきたとか。こういったことをひたすら繰り返した4年間だった」などである。これらの失敗経験の積み重ねが、登山の知識はもちろん、装備の充実につながっていった。

また、道具の選定に関して、「様々な機能を備えた様々な物が欲しいというより、私はザックやウェアがすごく好きで、ファッションというか、見た目にとこだわる」とも語っている。

#### 3. 3. 2 技能次元

Aの登山形態は、「基本的にノーマルルートを選択していて、バリエーションルートはほとんどやらない。沢登りやクライミングなども、ほとんどしないが、用具は持っていて、誰かに誘われれば行く程度」である。自身の技能については「登山の技能レベルとしては一般的なものである」と自己評価している。ただし、「社会人になって登山はほとんど日帰りだが、学生時は縦走もしたし、テント泊も最大で6泊したこともある」というように、長期間の縦走登山を実践することができる技能は十分に有している。また、「読図はできるが、ナビゲーションは未熟。その他の技能としてはファーストエイドの準備や見直し、危機管理意識を高く持つこと、最低限の野外救助法の研修は受けている」ということから、安全への配慮、技術習得への向上心を持っていると言える。

こうした登山技術の習得への向上心は、用具次元と同様に、「失敗経験」が契機となっているとAは語っている。自分自身の「痛い目を見た」経験はもちろん、「同行者の予期せぬ怪我やトラブルへの対処」が技術習得への動機づけとなった。また、「大学3年生時に同年代のリーダー研修へ参加した際の周囲の参加者との技術差」が技能を高める重要な契機になった。「その研修で他の人たちの技術を初めて目の当たりにして驚いた」ことから、技術向上の動機づけが生じたと語った。ただ、「登山中の生活技術は人並み以上の能力はあるが、クライミングなど特殊で専門的な技術については、周囲の人と差を感じるし、その技術を伸ばそうという志向はない」とも

語っている。

その他に、Aは登山における必要な技能として、「情報収集能力」を挙げている。例えば基本的なルートの事前確認、日の入りと日の出時間、山小屋の情報、行き帰りの道路状況、山道の路面状況などがそれである。これらの周辺的な情報も登山においては重要であり、これらの情報を収集する能力も失敗を重ねるごとに身につけたという。さらに情報収集については、上記のような項目だけでなく、「山で偶然出会った人とのコミュニケーションと口コミ情報」を得ることも大事であると語っている。事前の調べで得られなかった現場の情報や、経験者が語る周辺的な情報、今登っている以外の山の情報など、こうしたコミュニケーションから得られる情報も重要だとして、「これは登山の楽しみの一つでもあり、人脈形成にもつながる」ものであり、仕事としても個人の志向としても、「その人が山で感じた何かを知ることが楽しい」と語っている。

### 3. 4 感情局面

#### 3. 4. 1 中心性次元

Aの登山の活動費用は、1か月あたり、用具(ウェア含む)に15,000円、旅費に30,000円が平均的な金額であり、購入する用具は、ギアよりウェアの方が多い。これは、社会人になってからのプライベートにおける登山活動費用である。しかしながら、その平均額は年々増えており、「大体このぐらいという感じで、正確に数えることはしていないが、正直怖い金額」になっている。この費用については、大学生時にはあまり費用をかけられなかった反動があると語った。

また、自由時間の配分については、大学生時には自由な時間の3分の1程度しか登山に充てていなかったが、現在では「自由な時間はほぼ山」である。これは職業柄によるものでもあるが、現在では、実際に山に登ってなくても登山のことを考えている時間が生活のほとんどとなっている。「山に想いをさせる時間も登山である」と語っている。

さらに、登山の目的や目標に関しては、大学生時と現在とは異なっていると語った。上記のように、

大学生時は「自分の体力への挑戦」、「数多くのピークを踏むこと」、「全ての山に登りたい」というものであった。社会人になってからは、仕事における取材を目的とした登山も増えたが、プライベートでも「山ごはんのために山へ行く」「自然に癒されたり、紅葉を見たりしに行く」というものへと変化した。この変化についてAは、「今はテーマを大事にしている。疲れてしまうということに気がついた」と述べている。この疲れてしまうという回答に否定的にニュアンスはなく、むしろ仕事を通じて様々な登山の側面を知り、登山に対する可能性の広がりを得たと語っている。

#### 3. 4. 2 重要性次元

Aは、「仕事を抜きにしても、含めたとしても、登山が人生のサードプレイスとなっており、家族、仕事と並んで人生において重要な位置を占めている」と語った。優先順位で言えば家族が最上位であり、登山が第一ではないが、「中心ではないにしても人生に必要なものである」という認識を持っている。例えば、「家庭を持つことも幸せで、家族みんなであるということも大事だし、仕事もすごく楽しいが、それだけだと自分の中では何か物足りなくて、山があることでバランスを保っている」という。このような認識を持つに至った経緯について、「それは社会人になってからなのかなと思う。それまでは、『とにかくさん登りたい』という感じで登っていたが、自分がどうして山に行くのかとかも、そんなに考えたことがなかった。結婚と妊娠、出産を通じて、山に行きたくても行けないこととか、いっぱい行っていいよとなったら自分がどう動くのかとか、あとは山が好きな人と結婚したとか、そういういろんなことがあって、『自分の人生に山ってめちゃくちゃ大事なんだ』と気づき始めたのが、本当にここ最近だ」と語った。

また、現在のコロナ禍やその中の妊娠、出産という経験の中で、「登山は結局フィールドにいる時間よりも、準備をしたり思い出を振り返ったりする、想いをさせる時間のほうが長いといった、そういう遊びなのではないかと思っている。そういう時間も含んで大事と思うようになった」という。Aは継続して

10年以上山に登り続けてきたが、こうした物理的な周辺事情、ライフイベントによって登山が不可能になった空白の時間が、登山への考え方を見直すきっかけになった。そしてこのことが、「また登山ができるようになったら何をしよう」「子どもと登ったら何をしよう」というように、この先の登山への志向の強化や変化、期待につながっているとも語っている。

### 3. 4 その他の語り

以上の質問項目の他に、「登山がアイデンティティであるのか」「長年の登山経験の中で一番印象的で重要性がある登山経験は何か」を尋ねた。

1つ目のアイデンティティに関する質問に、Aは「ある」と答えた。その理由として、「自分を知らない人に自分を紹介するとしたら、絶対に山の話は入る」ということであった。しかし、アイデンティティを際立たせるために登山をするのかという、目的と手段を逆転した質問については、「いいえ」と答えている。これは登山を、承認欲求を満たす手段として認識しているかという意図の質問であるが、これについては、「読者の人が私の記事を読んだときに、私が全く山に登ってない人だったら読み方が変わるだろうなと思っていて、そのために行ったことない山にもたくさん登らなきゃいけない」と、言わば義務感のような感覚を持っている。ただし、「私がどれだけ能力があるとか、どんな山に登ったことがあるだとか、そういったことを他者に自慢することはない」とも語っている。

2つ目の印象的な登山経験についての質問には、「大学2年生の夏にワンダーフォーゲル部の4人で北アルプスに4泊5日で登ったこと」と答えている。その登山経験では、「景色にすごく衝撃を受けて、『こんな世界があるんだ』と思ったのはいまだに覚えている。あとは、一緒に行ったメンバーとの関わり合いがすごく面白かった。疲れてけんかしたとか、そのときの話だったら、そのメンバーと本当に何百回話しても笑い合っただけ。そういう『自分にとっては宝物だな』と思える登山だった」と語っている。このような景色の良さ、仲間との関わりがインパクトのある経験として現在の登山志向につながっている

ことから、「山で人といるのってすごく面白いなこのとき思った。『山と人』というものをすごく意識するようになったきっかけだった」と語っている。

## 4. 考察

インタビューの結果から、Aは10年以上の時間的経過の中で、登山に対する専門志向化を発達させており、本研究の対象として妥当であることが確認された。

考察の観点には、「専門志向化につながった動機づけの要因」と「専門志向化が発達した要因」を明らかにすることとする。前者については、まずは登山への関与の入り口がどのようであったかという問題であり、後者については、関与が定着した後に離脱せず、生きる上で重要であるものとしてどのように位置づけられていくのかという問題である。これらの観点は、本研究が目的とする、「人々がアウトドアスポーツ(登山)において専門志向化していく条件」を抽出するための中心的な問題点であると言える。したがって、本研究ではこの発達の条件の抽出を目的として考察を展開する。

### 4. 1 動機づけの要因

1つ目の動機づけの要因について、上記の結果を振り返りながら指摘していくこととする。

まず指摘し得ることは、Aが登山に関与していく最初の契機において、父親や指導者といった専門家ないし高い専門性を持つ人物からの影響が大きかったという点である。登山に何の志向もなかったAがそれに興味関心を向けていったのは、適切な経験と技能を持った人物が身近にいたからに他ならない。父親の勧めや指導者のフォローが登山への関与の定着を促していることは明らかである。したがって、こうした身近な他者からの影響が動機づけ要因の一つとして指摘できる。スポーツにおける社会化の研究では、多様で個人的な属性を有する学習者が、その学習者にとって重要な他者に影響されることで、スポーツ的な役割へと社会化されていくという仮説がある(岡田, 1984)。Aにおいては、父親や指導者が



登山者としての役割へと社会化されていく局面における重要な他者であったと考えることができ、こうしたことから、この指摘が妥当であると主張し得る。

そして、この動機づけが初期段階に機能し続けた要因として、父親から登山靴を買い与えられたことはもちろん、大学生時の部活動で登山の用具をある程度自由に活用できたことも大きいと考えられる。登山には専門的な装備が必要であるが、それを揃えるためには多くの費用がかかる。登山への関与の初期段階である大学生時には部の装備を容易に活用できる状況にあり、それらの使い勝手や必要性を実践で試すことができた。こうした用具やそのための金銭の充実の有無による参加の動機づけへの影響については、阻害要因の研究が参考になる。例えば伊藤ら(2016)は、大学生の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因を国際比較した研究において、金銭や用具の問題を含む構造的阻害要因は、日本人の方がカナダ人より有意に高いことを明らかにしている。このことから、Aの場合、初期段階において用具的な環境が充実していたことにより、自らのリソースをそれほど割かず活動へ関与できたことが阻害要因を低減させ、継続の要因になったと考えることは妥当であろう。

さらに、Aの場合に重要なことは、登山が人生において重要な位置を占めていたスポーツ(バスケットボール)の「代替としてフィットした」という点である。体力に自信があり、それを見極めたり高めたりしたいというスポーツマインドを持っていたAにとって、「スポーツ的な別の何かによる代替」「ステップアップとコンプリート」の志向は、登山を愛好する前提条件であったと言える。このことは、初期段階において登山への関与の選択基準となり、かつ目的意識としても大きく機能していると言えるだろう。

以上の考察から見出される動機づけの要因として「重要な他者の影響」と「用具的環境」、そして「目的意識」が挙げられるのである。

#### 4. 2 発達の要因

続いて、2つ目の専門志向化の発達の要因について、結果を振り返りながら考察していく。

動機づけの要因において指摘したように、Aの場合は初期段階において、用具的な環境に恵まれていたことが登山への関与が定着していった要因の一つだと考えられる。その後、登山経験を重ねるにつれて所有する用具を増やしていったが、所有用具の増加や選好には失敗経験が大きく影響していた。また、技能次元においても同じく失敗経験が強く影響しており、特に安全への配慮や技術習得の面で失敗の経験が技能を高めるきっかけとなっていた。したがって、用具次元と技能次元の発達には活動経験の中でも特に失敗経験が強く影響することが示唆された。

また、Aは数多くの登山経験の中で、決定的に重要な、印象的な登山として「大学2年生の時の仲間との登山」を挙げていた。この経験についての語りで強調されていたのは仲間との交流である。5日間の登山の中で濃密な仲間との交流によって、「自分にとっては宝物」と言う程の特別な登山経験となっている。この他者との交流という点について、例えば藤田(1998)は、スポーツの社会化過程において、ある個人に関わるエージェントが時間経過とともに変化することや、その個人がエージェントと相互作用することで、自らを主体的にスポーツへと社会化していくと述べており、他者との相互関係の影響の強さを指摘している。Aにおいても関与の初期段階における重要な他者は父親や指導者であったが、それが徐々に、一緒に山に登る仲間へと変化し、仲間との相互作用によって登山への関与を深めていったというプロセスが見られる。

この印象的な登山経験についてさらに指摘できることとしては、「次もまた、次はもっと楽しいことがあるかもしれない」という期待である。この期待はまさに強い動機づけとなるし、この印象的な経験が登山への関与の初期段階にあったために、次の活動への期待が生じ続けてきたとも考えられる。このような経験は、大学生時の活発な登山経験につながっており、専門志向化の発達においては特に行動局面の参加次元に影響を及ぼしていると言えよう。

そして、Aは経験を積むにつれ、また社会人となり仕事に関わるようになってきて、初期段階のスポーツマインドによる登山への目的意識から、「景色や食

事、山での交流を楽しむこと」へと目的意識や志向性がシフトしてきた。このような、活動の強度が高い方へではなく低い方への変化は、ネガティブな変化というよりは、「楽しむ」という持続性の高まりを促すものであると考えられる。

この目的意識や志向性の変化は、主に感情局面の中心性次元と重要性次元において語られていた。中心性次元においては、特に仕事を通じた登山経験が目的意識や志向性の変化を促した要因であった。また、重要性次元においては、特に結婚と妊娠、出産という重要なライフイベントが変化の要因であった。仕事を通じて登山の多様性に触れたことや、ライフイベントによって登山への関わり方を変化せざるを得なかったことによって、Aは登山に対する価値観や今まで見ていなかった登山の諸側面へと気づくこととなる。

これらつまり、登山への関与のモードが変わったとも言える。このモードの変更について、Aは登山関与の初期から続いてきた「体力的な挑戦」という志向に対し、体力の低下や気づきなどを契機として、また、ライフイベントによる自身にとっての登山の価値の捉え直しによって、初期の志向に「飽きた」と言うことができる。しかしながら、この「飽きた」ことによって無理やこだわりが削ぎ落され、かえって持続可能性の高いモードに入っていったと推察される。

松本（2018）は、専門志向化しているスクーバダイバーは長期間にわたって飽きないようにダイビング志向を変化させていると指摘している。したがって、Aにおいても目的意識や志向性を移行させたことによって登山経験が継続されており、特に感情局面の発達の要因となっていると考えられる。

このような活動強度の低い方への変化は、時間の経過に伴って技術と場面のスペシャリストに変化していくとされる専門志向化の過程においては、停滞や後退ともとれるものである。しかしながら、Aの場合には活動の強度を下げるのが単なる停滞ではなく、活動の持続に寄与することにもつながっており、その内実は人間的な成熟に伴う感情局面の質的な発達と言えるものである。このようなAの経験は、多様

性や個別性の高い専門志向化の発達過程の検証における重要な事例であると言える。

さらにAの事例からは、登山に対する専門志向化の発達が自己のアイデンティティの成立に強く関係していることもうかがえた。Aは、自分とは何であるかという自己言及においても、自己の他者への紹介においても、「登山が好きである、登山に詳しい、登山ができる」と表明すると語った。特にこの「できる」という能力的な自己への確信は、これまでの登山活動において蓄積された経験と習得してきた技能によるものであり、経験の蓄積や技能の定着は、「自分がなし得ること」という自己認識へとつながり、自己に対しても他者に対しても自己同定の契機となり得る。したがって、このような状態の実現はアイデンティティの成立に強く関係するだろう。そしてアイデンティティと成り得た「登山をする私」は、継続的な活動への関与を促し、さらに専門志向化を発達させる要因となるものと考えられる。

以上のことから専門志向化の発達の要因として、「印象的な活動経験」と「重要な他者との相互作用」、「志向性の変化」、そして「アイデンティティへの定着」が挙げられるのである。

## 5. まとめ

本研究は専門志向化が進行した登山愛好者を対象として、ライフストーリー分析を用いて、専門志向化の発達過程とその要因について検証した。その結果、以下の点が示された。

- 専門志向化過程の初期段階の動機づけにおいて、「重要な他者の影響」と「用具的環境」、そして「目的意識」が要因となっていた。
- 専門志向化の発達において、「重要な活動経験」と「重要な他者との相互作用」、「志向性の変化」、「アイデンティティへの定着」が要因となっていた。

以上のように、ライフストーリー分析を用いることによって、時間的な経過に伴う専門志向化の発達の諸要因（動機づけと発達）が具体的かつ明確になった。

しかしながら、いくつかの課題も指摘できる。例えば、失敗や苦勞といった一見ネガティブな経験であっても、「印象的な活動経験」として専門志向化の発達の要因になることが示されたが、人によっては活動からの離脱の要因にもなり得るはずである。このような経験がどのように作用するかは、経験の質や強度によることも考えられるが、経験をどのように受け止めるかというパーソナリティ特性にも大きく影響されるとも考えられる。この点については本研究では検証に至ることができなかった。

また、当然のことではあるが、本研究で指摘した要因は様々なライフイベントも含めて、相互に関連しあっている。したがって、これらの要因をあげて確認するだけでは、専門志向化の発達過程を単純化しすぎる可能性もあると言える。

今後は他の事例も検討しながら、専門志向化の発達の要因について整理していくことが必要である。

#### 引用・参考文献

- 1) アウトドアスポーツ宣言, [https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1399436.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1399436.htm), 2022年11月30日参照
- 2) Bryan, H. (1977) Leisure value systems and recreational specialization: The case of trout fishermen, *Journal of Leisure Research* 9, 174-187
- 3) Bryan, H. (1979) Conflict in the great outdoors; Toward understanding and managing for diverse sportman preferences. *The Birmingham Publishing: Alabama*, pp.1-98
- 4) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次 (2002) レクリエーションの専門志向化: その研究動向と方法論, *体育学研究* 47, 319-331
- 5) McIntyre N. Pigram. JJ. (1992) Recreation specialization reexamined: The case of vehicle-based campers, *Leisure Sciences* 14, 3-15
- 6) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次 (2005) レクリエーションの専門志向化過程からみたウインドサーフィン行動—レジャーの社会的世界におけるフィールドワークを通じて—, *レジャー・レクリエーション研究* 54, 1-10
- 7) Ninomiya Hiroaki. Kikuchi Hideo (2004) Recreation Specialization and Participant Preferences among Windsurfers: An Application of Conjoint Analysis, *International Journal of Sport and Health Science* 2, 1-7
- 8) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次 (2006) 専門志向化の概念枠組みによるウインドサーファーの類型化とその測定指標, *レジャー・レクリエーション研究* 56, 1-10
- 9) 松本秀夫 (2015) レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性に関する国際比較: 日米のスクーバダイバーを対象として, *東京海洋大学博士論文*, pp31-57
- 10) 松本秀夫・千足耕一 (2018) 海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与えた影響, *野外教育研究* 22 (1), 19-36
- 11) 桜井厚 (2012) ライフストーリー論, *現代社会学ライブラリー* 7, 弘文堂
- 12) 岡田猛・山本教人 (1984) スポーツと社会化論についての一考察—Social Agent と Socializee の相互作用の観点から—, *体育・スポーツ社会学研究* 3, 道和書院, 79-95
- 13) 藤田紀昭 (1998) ある身体障害者のスポーツへの社会化に関する研究—車いすバスケットボールプレイヤーの個人史より—, *スポーツ社会学研究* 6, 70-83
- 14) 伊藤央二・山口志郎・岡安功・北村薫・Gordo A J. Walker (2016) 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響: 日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討, *体育学研究* 61-1, 11-27